

3 錨鍛冶

さあ見よ ドルフィン号の錨造りを 今まさに白熱の最中
 鞆は停止し 火の勢いは小さくなったが 炉の上では
 小さな火焰がなお時折赫々と漆黒の石炭の山の中で燃え立ち
 明滅のたび 居並ぶ厳めしい鍛冶職人たちの姿が見えよう
 全身革の防具を身に着け 大きな手だけがむき出し
 大槌に寄りかかる者や 巻揚げ機を動かす者もいる 5

巻揚げ機が滑車装置の鎖を引く 黒い石炭の山はその下で膨れ上がり
 発作のように身悶えしては 無数の深紅の血管がどっと浮き出る
 炭山は隆起し轟音をたて たちまち裂ける おお神匠よ なんとという輝きだ
 目が眩むほどの白光 焼き尽くさんばかりの光輝 高みの太陽さえ及ばぬ 10
 太陽とて地上でこのような火焰の恐るべき見世物を目にする事はない
 黒い屋根の肋材 白熱する炉床 そして赤々と照らされた鍛冶職人たち
 列をなして立ち 熱気を帯びた集団は まるで敵を前にした兵士のように
 眼前には火焰に包まれた身を震わせながら滑り行く怪物が ゆっくりと
 鉄床の上に沈み込む 周りを囲む職人たちの顔はみな赤々と輝いている 15
 「やあっ 跳ねろ 跳ねろ」ガンガンと大槌が鳴る

やあっ 吹き出す電光が上へ下へシュッシュッと音を立てる
 勢いよく大槌を打ちつけるたびに 雨あられと火花が噴きあがる
 革の鎧がその火の粉を跳ね返し 燃え殻が音を立てて
 床一面に散らばる 跳ね返るたびに灼熱の泉がほとばしる 20
 汗だくになりながら男たちは 一打ごとに「息を切らしホッ」と声をあげる
 跳ねろ 跳ねろ わが熟練工たちよ 跳ねろ そして力いっぱい打て
 立派な錨をこしらえよう どでかい船首錨を
 樅の心臓を持つ船が この一撃一撃にかかっているのだ
 立派な船が危険な錨泊地に停泊しているのが目に浮かぶ 25

風下では低い暗礁が轟き 次々と押し寄せる荒波が
 船首から船尾までなだれ込み 大槓は船外へ倒れ
 舷牆は崩れ 舵はなくなり ボートは船側で打ち碎かれた
 だが怯むな 勇敢な船員たちよ 船首錨はまだ無事だ
 あいつは一寸たりともびくともしない 船が空高く跳ね上げられる時を除いては 30
 錨はその頭を動かす まるでこう言うかのように 「恐れるな 俺がついている」
 鍛冶職人たちよ 規則正しく大槌を振り下ろせ 手足のリズムを保て
 お前たちの槌音はどんな教会の鐘よりも甘美な音を奏でる
 そして 大槌を振るいながら歌え 合いの手はこうだ

いかり かなとこ
錨は鉄床の王 俺たちは王の職人だ 35

打て 打て ざわめく赤い火花も次第に色を失うぞ
ハンマー
大槌の響きが鋭くなるのは 仕上げが近い証拠
いかり ふしど
錨はまもなく燃え盛る華麗な火の臥所から移されるのだ
へさき
轟音を上げる舳先の吊り床へと あるいは海底の泥土の寝床へと
いかり
錨はまもなくここにいる陽気な職人たちの歌を離れ 40

船員たちの「えんやこら」「よいと巻け」というため息まじりのかけ声に迎えられるのだ
夕暮れ時 船員らはゆっくりと 錨を揚げながら 愛する人と故郷から遠く遠く離れていく
むせび泣く恋人たちは列になって いつまでも海の泡を見つめ嘆き悲しむ

ついに青黒く硬い闇色へと 錨は冷え沈んでゆく
ちようびようか いかり
吊錨架から投げ下ろされたどの錨にも劣らぬ 見事な姿と頑丈さ 45

おお 頼りになる心強い護衛よ もしお前が俺のように生命を持っていたなら
碧く深い海の底で どれほどの喜びがお前の労苦に報いてくれるだろう
おお 深海のダイバーよ お前が見るような光景を目にできる者がいようか
白波を戴く太古の海の主の宮殿だ さぞ楽しいことだろう
真っ逆さまに飛び込み 鯨の群れへ混じっては 50

鞭打つような尾鰭の下 周囲の海が激しく泡立ち沸き立つのを感じるのは
深く鬱蒼とした海草の森では 獐猛な海の一角獣と戦い
象牙色の角をものともせず 吠えながら退散させるのは
頭に硬骨の剣を持つあの油断ならない剣魚をお前は途方に暮れさせ
そして不気味に歯をむく恐ろしい鮫には その顎を一笑に付してやるのだ 55

ノルウェーの島々の間を行けば 海の怪物の背中にぶち当たる
そいつが鈍重な巨体を横たえ 何マイルにもわたって海を突然浅瀬にしているから
だが衝撃でついには海中火山のように鼻を鳴らし ごろりと身を翻して去っていく
一方で お前の進水の勢いは 海の怪物の背中を餌場にしていた海獣の仔らの
遠くで驚くその群れを大きな波で揺さぶるのだ あるいは偶然 60

貝殻が散らばり 古くから水の精の愛に捧げられた入り江で
長い髪の人魚を見つけたり 凍りつく土地のすぐ近く
紺碧の砂の上で海蛇と格闘したりするのだ

おお 太い腕を持つ深海の漁師よ お前の戯れに匹敵するものなどあろうか
ドルフィン号は千トンもの重量があるのに お前の太綱に引き留められる 65

お前の夜毎の喜び 日毎の栄光は
漆黒の海と白く碎ける波の間で 壮大な遊戯を繰り広げること
それに比べて人間の戯れなどちっぽけなもの 先ほどの失言を許したまえ
漁師の喜びは獲ることだが お前の任務は救うことだ
おお 海王の館に住まう者よ もしお前にわかるものなら 70

傍らに転がる白い骨が誰のものか あの濡れた一団にはいったい誰がいるのか
彼らはうねる波にゆっくり揺れながら お前に纏わり付き
まるで夢の中で白波碎けるようなかすかな音を立てて 古くからの友を祝福している

おお どれほどの英雄たちが大きな歩みで辺りを漂っているか お前にわかったなら
その鉄の脇腹は誇りで膨れ上がり お前は海中で踊りあがるだろう

75

安らかな岸を永遠に後にした英雄たちの記憶を讃えよ
故国への愛のために血を流すことを厭わなかった彼らに
静かな余生と草の生い茂った教会の墓地に眠る機会を捨て
絶えず揺れ動く波間の休息なき床を選んだ彼らに

おお 我らが^{いかり}錨はこの詩で愛情込めて唄ったほどのものではないかもしれぬが
英雄たちの記憶のためにこの^{いかり}錨を^{いかり}錨を讃えよう 彼らの骨々の間を通りゆくこの^{いかり}錨を

80

(三木菜緒美訳)